

今昔物語

昭和39年農業高校を卒業して農業に就いてからもう40年余が過ぎてしまった。農家の長男ということで何の違和感もなく当然のこととして農業者となった。戦後19年が過ぎようとしていた。次男、三男の男子と女子は15才で中学校を卒業してすぐ、東京や関西方面へ集団就職列車で行く時代であったから、農業高校で学んで農業に就く事はむしろ恵まれていたのかもしれない。しかし多くの国民の生活は衣食住どれをとっても満足するものではなく、とりわけ主食の米は不足気味であった。担任の先生から、「君達は国民の生命を守る食料を生産する大切な仕事を担うのであるから自信と誇りをもって頑張るように」と励まされた。

国民はオリンピックによって高揚し、この時代から日本の経済は徐々に発展していったが、農村の生活は文化とは程遠く、経済的にも恵まれる事は少なく、3年に一度、時には連続して襲ってくる冷害、水害、台風が更に拍車をかけていた。だがそれでも現在の様に離農する人はごく稀で、試験機関は耐冷で増産品種の開発に努力し、農家は客土、暗渠、開田と米の増産に努力を費やしていた。

そんな中にあっても、農村には集落全体で守るべきものがいくつもあった。6坪程の神社に元旦には全員が集まり、マイナス20にもなる部屋で一年間の家内安全、天下泰平を願い、4月には厄年の厄払い、五穀豊穡を、9月には豊作を感謝し、青年団は演劇や踊りを披露した。子供達は奉納相撲で勝者にはノートを、敗者にはエンピツを、時に女子が出

て勝ったものなら住民の拍手喝采で大騒ぎである。7月の土用の3番(土用に入ってから3日目)には地域総出で用水路の土砂上げや草刈り、終わったあとは近代農業への発展への開拓戦士とも言える農耕馬に感謝を込めて、川辺に埋もれるように建っている馬頭尊碑に集まり、火災や病氣、老いて眠れる霊に手を合わせ、大人達は酒を飲み、子供達には駄菓子や両手一杯振まわれていた。労働は殆どが手作業で機械化等とは程遠い時代であった。

しかし今想うとこの時代が一番良かったんじゃないだろうか。経済的には恵まれていなかったが、貧しくとも皆んなで助け合い、地域全体で老人を敬い、子供達を育て、動物や食べ物に感謝し、そんなあたり前の繰り返し。40年を経た今はどうなっているのだろうと思う。栄枯盛衰ということなのか。集落も当時の半分以下、朽ちた神社の改修も目途が立たず、お祭りも形だけ、馬頭尊碑も老人が草刈りをするだけ。どこにも子供達の声はない。あと10年で更に半減するという。食料が氾濫する中で高齢化が予想を超えて加速し、格差社会は農村も例外でなく、担い手対策は小農家の離農を早めているようである。今年から始まる農地・水・環境保全向上対策によってお金が出て来るが、昔の様に地域の連帯によって穏やかな生活と食料を生産する誇りが戻って来るのだろうか。都市も農村も今何が起きていて、何をすべきかを考えるべき時ではないかと思う。

(北海道岩見沢市

廣川農場 取締役 廣川丈夫)